

『文化財を活用した地域振興』in 北陸 ～「文化財保護」と「観光」を両立する「まちづくり」のとりくみ～

2025年10月2日 富山国際会議場

文化財を「保存する」だけでなく、観光やまちづくりに「活用する」取り組みが各地で行われています。こうした背景のもと、中部圏社会経済研究所と北陸経済研究所との共催により、「文化財の活用による地域振興」をテーマとした時事フォーラムを昨年10月に富山市内で開催しました。本稿では、その中から基調講演と事例紹介を取り上げます。

1. 基調講演

「文化と観光とまちづくりのよき関係について」

文化庁 文化観光推進コーディネーター 丸岡 直樹氏



2015年	パリューマネジメント株式会社 入社
2017年	観光庁観光資源課出向 (～2019年)
2021年	文化庁出向 文化観光推進コーディネーター
2024年	立命館大学大学院 観光MBA客員准教授 (兼任)

●文化と観光それぞれの視点

今日の基調講演でお伝えしたいのは、「視点」という言葉です。「文化」、「観光」、「まちづくり」、どの立場から見のかによって、考えることも違えば倫理観も違う。それぞれの立場に立って、視点を切り替えながら、それぞれのよさを生かしていくことが大切だと思っています。

文化財は、例えば江戸時代においては名家の方々が残す努力をされて、その後は税金など公費で維持されてきましたが、人口減少、少子高齢化が進む中、そろそろ限界が来ていると思います。文化庁もまさに「文化財を保存する」という概念から、「保存のために活用する」という概念に舵を切っていますが、その際に注目されるのが「観光」という立場からの視点です。

観光はビジネスですから、顧客の満足度を上げる必要があります。また、文化財や地域の宝には地域側の気持ちが必要ですし、行政による支援が多いため、行政からの視点も必要です。観光においては「稼げること」や「お客さまに喜んでもらうこと」が目的となる一方で、文化・地域側からすると、「大切にされること」や「正確に情報が伝わること」が重視されるというふうに、立場による相違が生じてしまいます。これらはすれ違うことが本当に多いので、両者をつなぐことが必要になります。

例えば、奈良で出土した火熨斗^{ひつぎ}(図1)という道具は、重要文化財にも指定されていますが、文化側の方々

図1 奈良で出土した火熨斗



で、とても歴史に詳しい方々が、「これは古墳から出土したものです。他にも副葬品^{ひつぎ}には中国や西アジア由来の珍しいものがある、棺の中の人物は冠や指輪、ガラス玉などの豪華な海外製の装飾品を身につけていました。古墳時代の火熨斗の出土例は2点しかないため、非常に価値が高いのです」と一生懸命説明されても、これでは観光客に伝わりません。

しかし、民間や観光側の人たちが協力すると、いろいろな伝え方が出てきます。「火熨斗というのは古代のアイロンなのです。アイロンが古墳から出土するということは、昔の人にも服にしわがないことが美しいという価値観があったということで、1500年以上前の人たちと現代人の美的感覚が一緒なのかもしれない。それを証明できたのはこの火熨斗のおかげです」と説明されると、より伝わりやすいかもしれません。これが「視点」の重要性なのです。

●文化財とは

文化財とは、柔らかい伝え方で言うと人類の遺産です。過去においても価値があり、未来にとっても価値があるものです。しかし、その時代ごとにさまざまな価値観があり、廃仏毀釈のように先祖が大切にしていたものを簡単に壊してしまう出来事が繰り返されてきたことも、文化財を取り巻く歴史だと思います。あらためて意識したいことは、今残っている古民家や文化財は、かつての人たちが大切にしてきたものだということです。100年前の人たちが100年後にも残るようにと建物を造っていなければ残らないものなのです。この価値は今の世代だけで消費してよいものではなく、未来に渡していくことが大切なのです。

同時に、「未来のためのものだから、今使ってはいけない」ということではないと思います。大切だからゆえに永遠に箱の中に入れておくのではなく、今の

人たちも価値を感じて、自分たちの心を豊かにして、その価値を未来に継承していくのが、文化財とのよい関わり方ではないかと思っています。

●文化観光という考え方

文化庁では、文化財を生かしていくという観点から、「文化観光」という施策を進めています。

今までの施策は、文化財の保護を優先してきた背景があります。時代によっては大切にされないシーンが多かったこともあって、「保護・保全しよう」という動きが強くなったと思われます。しかし令和になると、「地域らしさって大切だね」とか、「地域を象徴する文化財って価値があるよね」と思ってくれる方が本当に増えてきました。

文化財を「大切にしよう」という機運が高まりましたが、^{ただただ}唯々守るだけではなく、これを活用することによって価値を知ってもらう。そして、価値を知ってもらうことでお金が還元される。そんな関係性を築きたいと考え、文化芸術基本法の改正・改称、文化財保護法の改正、そして、文化観光推進法の制定と、私たちは観光を切り口とした文化財政策の転換を進めてまいりました。

文化観光について2つに絞って言うと、1つ目は、「文化についての理解を深められる観光」であること。2つ目は、「文化への再投資・好循環」を行うことです。

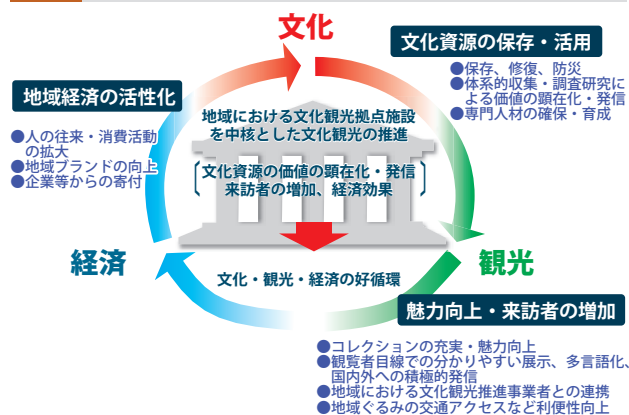
まず1つ目、「文化についての理解を深めることのできる観光」というのは、しっかりと価値を伝える努力を一緒にしましょうということです。文化側に伝えることとしては、先ほどの例のように、専門的な知識をひたすら伝えていくことは観光には合わないということです。それを分かりやすく伝えていく、知識がない方でも理解できる形にしていく、そんな配慮が必要だというメッセージです。観光側に伝えていることとしては、ただ写真がきれいに撮れたら良い、SNSに上げられたら良いではなく、地域の方々が大切にしている思いや本質的価値のようなものを少しでも伝える努力をしてほしいというメッセージです。

2つ目は、「文化への再投資・好循環」です。観光といったら、自然とか、食とか、文化だとかが目的ですが、いざ観光客に来ていただいてお金を落としていただくとなったときに、その文化の担い手や建物への還元が少なかったりするのです。文化の担い手や文化財の保有者だけでなく、そこを仕組みとして解決して

いくデザインが必要という考え方です。未来への持続性を考えて、文化の担い手たちにもお金が回る仕組みを是非併せて創っていただければと思います。

こんな思いで文化を保存・活用していく。活用することによって、観光客の満足度につながる。その満足に対して喜んでお金を払っていただく。払っていただいたお金がまた文化や地域に還元されていく。この「好循環のデザイン」を私たちは実現していきたいのです(図2)。

図2 「文化・観光・経済の好循環」のデザイン図



●変わらないために変わる

地域で大切な文化財などを持っている方々は、「これは先祖から引き継いできた大切な場所なのだ」などと考えがちになるかもしれません。でも文化財を大切にする方法は、「誰にも触れさせないこと」ではなく、なってきたのではないかと思います。観光や経済に携わっている方にとっては、お金もうけは重要ですが、素晴らしいことを一緒に行って価値を残そうとしてくれる人もいます。そういった方々とコラボレーションしていくことがこれからは必要になります。経済的に続かなければ、本当の意味での持続性も保てないので、きちんと稼いでいくことにもポジティブであってほしいと思います。

逆に、「まちづくりなき観光開発」が進んだ場合、地域固有の魅力を損なってしまうという、本末転倒の未来を招きかねません。経済側、観光側の方々には、単に開発を進めるのではなく、「地域らしさ」を生かし、それを損なわないようなお金の流れ方で、一緒にデザインをしていただきたいと思います。

「文化」、「観光」、「まちづくり」、それぞれの視点に立って、互いを補完し合う考え方を共有しながら、活動を進めていただければ幸いです。

II. 事例紹介 1

「旅人と地域をつなぐ金沢町家宿の取り組み」

国登録文化財 金沢町家 ゲストハウスあかつき屋代表 ^まち ^や ^ほり ^た 堀田 哲弘氏



1982年 株式会社北國新聞社入社
1998年 北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科入学
2000年 財団法人地域振興研究所入所
2011年 国登録有形文化財 金沢町家あかつき屋代表（石川県金沢市暁町21-18）

●金沢町家を宿泊拠点に

2011年から“ゲストハウスあかつき屋”を運営しています。文化的・歴史的な資源を活用して地域の活性化に貢献できないかと考え、金沢市の町家バンクを通じてこの古民家を見つけたことから始まりました。実はこの歴史的な建物は、偶然にも私が新聞社に勤務していた時の敬愛する大先輩の家であったこともあって、大切に残して活用していこうという思いはさらに深まりました。

建物を取得した後に改装していく際には、地元の建築家や工務店の方から「これはいい建物ですね」とよく言われました。金沢市には町家の保全と活用の補助制度があるのですが、市の建築関係の部署の方からも「この建物は非常に良い造りなので、ぜひ残してください」と勧められ、結果的に補助制度を活用することになりました。この建物は、昭和8年（1933年）の建物ですから、築92年になります。金沢にはこれよりも古い町家はたくさんあるのですが、非常に保存状態が良く、デザイン性も優れているという点で高く評価していただいています（図1）。

2011年に開業した段階で文化庁の調査官の方が来られて調査した結果、翌2012年に国の登録有形文化財に登録されることになりました。

図1 あかつき屋の概況

- ・ 建築年：昭和8年（1933年）
- ・ 構造：木造2階建て、^せち ^や 棧瓦葺き
- ・ 開業：2011年1月
- ・ 国登録有形文化財に登録される：2012年
- ・ 特長：①保存状態の良さ ②優れたデザイン性



銅板葺きの小屋根



玄関の優美な円窓

あかつき屋の事業には3つの経営方針があります。1つ目は「**宿泊事業**」。あかつき屋を簡易宿所として活用し、国内外の観光客に快適な金沢町家体験を提供することです。2つ目は「**金沢SDGsツーリズムの推進**」。町家の保存、伝統文化の継承、地域社会の活性化など、地域が抱える諸課題の解決に尽力することです。3つ目は「**旅行事業**」。金沢市内にとどまらず、より広い範囲で地域の観光資源・観光人材の発掘に努め、新しい旅行商品を提案・実施することです。この3本柱の経営方針のもとで、現在事業を行っています。

●旅人と地域をつなぐプラットフォームの役割

ここからは3つの経営方針に沿って、あかつき屋の具体的な取り組みをご説明します。まず1つ目の「**宿泊事業**」。国の登録文化財のあかつき屋は、金沢町家を活用した宿泊施設ではありますが、単なる宿泊施設ではなく、1つの象徴的な存在として、周辺地域や環境と一体となったおもてなしを提供しています。

具体的にはあかつき屋界隈のまち歩きなどを実施しています。まちの様子は年ごとに変わりながらも、金沢町家が点在しており、古くからの個人商店も残っています。金沢ならではの家並みがあり、黒瓦の屋根、雪吊り、融雪装置、お庭など、人々の暮らしの息遣い、営みを知ってもらいたいというのが、私どもの基本的な考え方です。

図2の左上の写真は、創業から100年以上続く金沢で最も古いパン屋さんで、金沢町家の造りをしています。右上の写真は金沢名物どじょうのかば焼き屋さんです。左下の写真は、北陸特有の黒瓦の屋根の雪景色で、庭には雪吊りもあります。右下の写真は、雪を溶かす融雪装置ですが、東京など暖かいところから来た

図2 宿泊者へのまち歩き案内

お客さまをご案内する主なスポット



▶パン屋・森長

▶雪で覆われた黒瓦屋根の家屋

▶どじょうかば焼き浅田

▶水を噴き出す融雪装置

人たちにはとても珍しいようで、興味をもって見ておられます。

私がお店とお宿をつなぐときは、単に地図をお渡しするのではなく、一緒にまち歩きをしながらお連れします。外国人の方などから、まち歩きの範囲を超えておでん屋さんやお寿司屋さんを紹介してほしいと言われるれば、直接店まで連れて行って、「よろしくお願いします」と紹介させていただいたりもします。

●さまざまな活動の拠点として

続いて、2つ目の柱である「金沢SDGsツーリズムの推進」についてです。あかつき屋1階の7.5畳のコミュニティスペースは、いろんな団体に利用していただいています（図3）。中部地方にある国立大学の学生さんたちが観光心理学を勉強するということで、まちなかのフィールドワークの拠点として使われました。東京の私立大学の研究室では、学生さんとともにあかつき屋の界隈でフィールドワークを実施し、道を挟んだお向かいのお寺で、この地域の発展策について提言していただきました。京都の私立大学で生活デザインなどを研究される学生さんは、卒業研究の勉強会でコミュニティルームとして使っておられます。計画行政学会中部支部では、あかつき屋を研究活動の拠点にさせていただいており、私自身も自治体をはじめとするいろんな研究機関と学会とをつなぐ活動も行っています。

宿を拠点とした活動支援では学生さんや研究機関の方の利用が多いのですが、あかつき屋はどういうわけかアーティストの利用も多くあります。例えば、玄関から入ってすぐの“上がりの間”には写真家の方の作品が展示してあり、宿に彩りと新鮮さを加えていただ

いています。

これまで私どもは地域と連携し、地域に元気を与えられれば良いと思い取り組んできました。その思いは“SDGsを基礎にした観光の活性化”、“観光振興を図っていこう”という金沢市の理念と同じであることから、「金沢SDGsツーリズム推進事業者」に応募。審査の結果、2023年、24年、25年と認定を受けることができました。SDGsを目指して何か特別なことをするわけではないのですが、「地域の文化や経済を守ろう」、「地域コミュニティや自然に敬意を払おう」という私どもの取り組みが市の理念と合致したものです。

●最後に ～開業からの15年を振り返って～

おかげさまで、あかつき屋は創業15周年を迎えました。3年ほど前から新たな取り組みとして、3つ目の経営方針である「旅行業」を立ち上げています。石川県は文化観光に力を入れています、その文化観光事業の1つとして、庭園文化観光事業を始めました。お庭を貴重な造園・歴史文化資産として評価し、啓発・普及させ、それにあわせて庭園観光を推進しようというものです。小松の^{こけ}苔の里や、山中温泉の加賀^{いりよくえん}依緑園などのお庭が最近再生されているので、そこを訪ねるツアーを企画しました。庭師さんにスポットを当てたことで、庭師さんならではの経験や見方を話してくださり、大変好評を得ています。

お宿は1つのスポットであり、点的な存在ですが、「地域空間全体を立体的に捉え、そこにどういう要素があるのか、どういう人たちの活動や思いがあるのか」ということを考え、その上で「人への関心や敬意（リスペクト）を軸にした、奥深い旅や滞在を作り上げていく」という立場に立っています。単にお宿業だけをやっているという意識はありません。

金沢市には、ひがし茶屋街や武家屋敷ほど知られていない場所にもまちのあちこちに歴史を色濃く残したちょっと良い町並みが残っており、それらをきちんと評価して残していこうという「こまちなみ」という条例があります。あまり皆さんには知られていないと思いますが、歴史的・文化的な空間が、面的にかつ良好な状態で残っていますので、そういうことにも目を向けて、お客さま方に紹介しています。まだまだ道半ばですが、地域の良さを残し、皆さまにも知っていただき、楽しんでいただくことを、これからも続けていきたいと思っています。

図3 宿を拠点とした学習、研究活動支援
大学生のゼミ旅行



Ⅲ. 事例紹介 2

「つくる人をつくる～日本遺産からはじまった 井波のあらたなまちづくり～」

一般社団法人 ジソウラボ代表 島田 優平氏



林業事業者、富山県庁勤務を経て、2008年
家業の株式会社島田木材入社。現在、代表
取締役社長

2019年 井波日本遺産推進協議会ワーキン
ググループ 座長

2020年 一般社団法人ジソウラボを設立、
代表理事就任

●歴史のまち日本遺産「井波」（富山県南砺市）

井波のまちは2018年に日本遺産の認定を受けました（図1）。それから新しいまちづくりをしてきましたが、主な内容としては「人づくり」です。なぜなら井波には歴史や文化、建造物、工芸品などいろんなものがありますが、それを誰が活用して、誰が運営していくのか、という人の問題を解決しなければならぬからです。

井波のまちは人口が減少しています。そのため一人ひとりがいろんな役割を何役も担わないといけなくなっています。このような状況をいかにして打破していくのか。自分ひとりでは限界があるので、仲間たちと会社や組織をつくりながら、井波を守っていく仕組みをつくって活動していますが、その1つが“ジソウラボ”という団体です。まちづくりの中で文化財を保護していくにしても、経済面が重要で、産業でまちを支えていかなければならないと思っています。これは今に始まった話ではありません。井波には630年の歴史があるのですが、五箇山^{ごかやま}でつくった“塩硝”^{えんしょう}の富が井波のまちに落ち、その力で文化力がついてきたという歴史があります。今後も

図1 日本遺産井波のまち並み



経済力・産業力といった力がなければ、まちを維持していけないというのが基本的な考えです。

井波は、周辺自治体が合併し南砺市になったときの人口が1万2000人。20年経った今、7600人になりました。あと30年ぐらい経つと、5000人になるといわれていますが、私たちのまちづくりの取り組みを行っていけば、5000人になっても、8000人のまちの規模を維持できるのではないかという感覚があります。この取り組みがさらに広がると、井波の人口そのものではなく、井波に関わっている“関係人口”によって、まちを守るのではないかという感覚です。

まちおこしの取り組みは、日本遺産認定がきっかけですが、井波のまちの特徴である、“大工の技”と“井波彫刻”という素地も重要だと思っています。この2つを大事にしながら、いかに新しく発展させていけるか。実際に目に見えるもの、お寺（浄土真宗大谷派井波別院瑞泉寺）や建築物がまだあるわけですから、それらをしっかり残していけるかどうか、そこにどうやって人が関わるのかということを大切にしたいと思っています。

井波のまちづくりにおいて一番良かったのは、2018年に日本遺産になったとき、私も含めて当時30代、40代の若い人たちが、「このまちを何とかして継承していかなければならない」と思ったことです。当時は新型コロナウイルスの発生前ですが、地域の雰囲気は落ち込んでいて、「市町村合併したけど、よくなっていないな」というような暗い話がありました。若い人たちが中心となって「まちづくりをちゃんとしよう」、「地域のことを考えよう」と話し合ったことをきっかけに、私たちは“ジソウラボ”という団体を2020年に立ち上げました。

●人づくりでまちづくり

日本遺産は文化庁が認定する事業だったので、いろんな専門家の方を派遣していただきました。まちづくりというハード面を志向しがちですが、日本遺産はソフト事業の観点で行ってほしいとのことでしたので、まず井波のまちについて、その価値の見直しから始めました。その際アドバイザーの方が「井波のまちはすばらしい。彫刻職人が1カ所に200人

近くも集まっているのは、世界中に井波しかないよ」とおっしゃった。「世界でも類を見ないまちだとしたら、これはまだまだやれる」と、自分たちが気づけなかった価値を外部の方に気づかせていただいたのも、モチベーション維持の上で良かったと思います。

一方、産業はどんどん廃れていっています。井波は100年ほど前から大きな工場や企業を誘致してまちづくりをしてきたのですが、今はそういった企業が撤退して、まちの中に非常に大きな穴が空こうとしています。時代とともに状況は変わってきているので、地域の産業をどのように育てるかということを、私たちは考えています。

近年、井波は古民家が宿泊施設に改修される動きがあり、今では8棟になりました。これまで井波で泊まる人は少なかったのですが、「宿泊」ができると、人が集まり始めます。人が集まったときに、今度は商売を起こす「人」が必要ということで、私たちは「人づくり」の取り組みを行っています。人を生み出すことは、まちづくりには絶対必要です。地元の人間だけでまちを支えるのはやはり難しいので、「どのように外の人を呼び込み、中の人と一緒にまちづくりができるか」。さらには「中の人になってもらうというサイクルをつくる」が必要があると思っています。井波というまちでは、過去に外部から人が来て何かのアクションを起こして、それが現在も残っているという歴史が繰り返されています。その現代版のサイクルをつくっていきたいと思っています。井波彫刻もその一つです。230年前に京都本願寺から前川三四郎という方が来て、彫刻の技術を井波に伝えたことにより、現在200人近い彫刻師が技を受け継いでいるのです。私たちが考えているのは、このようなアクションの源泉になれるような「生み出す人」を何人つくれるか。これが今後地域を活性化させる勝負のポイントになるのではないかと考えています。

井波にはパン屋さんがなかったので、「空き家を活用してパン屋さんをやりませんか」とインターネットで募集したら、2週間で「井波でパン屋さんがしたい」という人が来ました。次に、井波は交通の便が非常に悪いので、「交通の仕組みを一緒に考

えましょう」と募集したら、東京から二地域居住で、「移動の取り組みがしたい」という人が現れました。彫刻の糸鋸師^{いとのこし}という職人さんがいなかったなので、大事な職人さんを育てようとして募集したら、京都から学生が「卒業したら、井波で職人になりたい」と来てくれました。コーヒー屋さんを募集したら、富山から来てくれた。ビール屋さんを募集したら、2カ月で「やりたい」という人が現れました。彫刻の地域商社を募集したら、地元から東京に出ていた女性が「ふるさとで事業をしたい」と手を挙げてくれました。ジソウラボで具体的な事例を挙げて、「井波の空き家とか、そういったものを活用して事業をやりませんか」と募集したら、意外と早く、2〜3カ月でマッチングできて、事業を行っていただいています。

●未来に向けて

ジソウラボは現在もいろいろな募集をしています。が、事業立ち上げの当初はコロナ禍だったので、都会から「地方で仕事をしたい」という問い合わせがすごくあって大盛況でした。今は、都会を離れたくない人が多くなって、私たちの募集も、残念ながら、ほとんど響かなくなりました。どのように私たちが地域の魅力をつくれるか、新たなチャレンジが必要だと感じています。

私たちは外から来る人ばかりに注力して呼び込んでいた一方で、今では地元の人たちが「自分たちで何かをしないといけない」と、お店や会社をつくるようになりました。おかげで、2017年から23年までの7年間で、半径500mぐらいの井波のまちの中だけで42軒、2025年の現在は60軒ぐらいの空き家がお店や事業所に生まれ変わっています。裏を返せば、それだけ空き家がまちの中で発生しているという危機的な状況ですが、私たちが目指す“歩いて楽しめるまちづくり”に、うまく活用できているのではないかと考えています。

空き家を事業所にすることなどで、井波に関わる人が増えてきています。若い人たちがまちの担い手になってきてくれていることで、居住人口が減少したとしても、井波のまちの活性化につながるよう、これからも頑張っていきたいと思っています。

IV. 事例紹介 3

「石川県七尾市

歴史的建造物やまち並みを生かした取り組み」

岡田翔太郎建築デザイン事務所商事合同会社 岡田 翔太郎氏



2014年 岡田翔太郎建築デザイン事務所商事合同会社を設立、代表就任
2015年 Under 35 Architects Exhibition (35歳以下の若手建築家による建築の展覧会) 出展
2018年 いしかわインテリアデザイン賞2018 石川県知事賞、金沢市長賞受賞
2024年 NPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会理事就任

●令和6年能登半島地震の防災

七尾市での、歴史的建造物の修復をメインとした復興活動についてお話しさせていただきます。私は大学で4年間建築を学んで、地元の七尾市に戻り、建築事務所を立ち上げました。それから約10年経った2024年の1月に能登半島地震が発災し、今は復興活動一色という状況です。震災の年にNPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会を設立し、2025年には「一人一花 in 能登半島実行委員会」を立ち上げて、復興活動をしています。

七尾には、“一本杉通り商店街”という500mぐらいある商店街があります。私の事務所はその通りにあり、「建築設計による復興」と「まちづくりによる復興」活動を行ってきました。今、まちには多

図1 一本杉通りの復興方針

実現のための5つの方針

一本杉通りの魅力とこれから懸念されることを踏まえ、目指す姿を実現するための5つの方針を設定します。これは、一本杉通りに暮らす私たちが取り組むことと、行政機関や御祓地域づくり協議会を始めとする、さまざまな方々と協働で取り組みたいことの、具体的な内容を挙げています。

方針1 明治から令和の家並みが息づく町

方針2 いろんな「屋」のふだんの魅力とハレの日の魅力とを届ける

方針3 チャレンジを応援して目的地となる“お店”を増やす

方針4 まちの「復興」を外にひらく

方針5 井戸端のある町、災害に常に備える町

くの空き地ができており、その空き地に何をつくっていくのか、あるいはどのように暫定利用していくかを考えるワークショップを開催しました。そこで出てきたアイデアが、空き地にお花を植えていく「一人一花」という活動です。暫定的にお花を植えることで、まちの再生につなげていこうというものです。

ほかにも多くの復興活動に関わってきましたが、「建築設計」と「まちのデザイン」とを複層的にどちらもフラットに行うことが、これからのまちづくりにとって重要だと考えています。図1は地域の方々と、これからの復興、まちづくりの方針を決めたものです。この方針を基本としながら、まちぐるみでさまざまな活動を展開しています。

また、個別の建物の修復も実施しています。商店街の中で被災した事業者の建物再建の設計などを私の会社でも行っていますが、修復している間にお隣の建物が壊れてくるなど、想定していないいろいろな出来事が起こってきます。

●一本杉通りの文化遺産を守る会の活動

NPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会は現在、登録有形文化財4軒の修復を支援しています。また、イベント開催を通じて七尾一本杉通りを広くアピールし、支援の輪を広げるとともに、一本杉通りへの来訪につなげることを目指しています。

2024年5月から9月に「一本杉通りの模型制作プロジェクト」を開催しました。1月の発災直後は、自分たちのことで手いっぱい、まちのことを考える余裕がなかったのですが、3月頃から「これから商店街をどうしようか」という声が徐々に聞こえてきました。この議論を加速させるために、「一本杉通りの復元模型を作成してはどうだろうか」と思い、50分の1の模型制作企画について、SNSを通じて全国の建築系の学生に発信したところ、延べ約60人の学生が全国から集まってきて、約半年間をかけて一本杉通りの復元模型が完成しました。

2024年11月には、「空想の空き地ワークショップ」を開催しました。解体空き地がまちなかに増え、雑草が生えてくると、まちが廃れていく要因となるので、「一人一花運動」以外でも、暫定的に何かに利用できないか考えてみたいと思いました。子ども

たちも多く参加してくれましたが、自分たちのまちを将来どのようにしていきたいのかを考える、いいきっかけになったと思っています。

2025年1月には、「能登半島の被災文化遺産」がワールド・モニュメント財団の文化遺産リストに選定されました。NPO法人では、財団の文化財復興プログラムの支援のもと、図2に示す4軒の文化遺産を修復しています。左上は和ろうそくのお店で、明治43年の建築。明治38年に七尾市内で大火があった後に建てられた七尾町家^{まちや}です。右上はお醤油屋さんです。明治41年に建てられ、一本杉通りで最も大きい間口を持っている重厚な店構えの建築です。左下は、昭和7年に万年筆専門店として建てられました。万年筆の形態を造形化したユニークな外観をもつ建物です。右下は創業大正元年のお醤油屋さんです。明治期に建設され、平成29年に国登録有形文化財として登録されました。この4軒のうち、私の会社は2軒の修復設計を担当しています。

図2 修復する4軒の歴史的建造物(国登録有形文化財)



左上：1階下屋（げや）部分が崩落した明治25年創業の和ろうそく店（高澤ろうそく店）
右上：明治38年の七尾大火の後、明治41年に再建された土蔵造りの建物（鳥居醤油店）
左下：万年筆のペン先をかたどった窓が特徴の万年筆専門店（旧上野啓文堂、現在は日本料理店 一本杉 川嶋）
右下：倒壊しそうな明治期建築の表土蔵（小山屋醤油店）

●歴史的建造物の復旧と新たな条例の制定

先ほどの和ろうそくのお店では、実測調査を終え、修復方針を検討する段階で、私たちは大きな問題に直面しました。建物修復のために“通り土間”をいったん解体する必要があることが判明したのです。この通り土間を解体してしまうと、それは現行法上の

「増築」として扱われ、建築確認申請が必要となります。しかし、建物の文化財的な価値を損なうことなく、現行の建築基準法に則ったかたちで申請を通していくのは、現実的にほぼ不可能です。

建築基準法は、「国民の生命、健康及び財産の保護」を図るため、建築物の地震に対する安全性や火災に対する安全性の確保など、「遵守すべき最低の基準」を定めています。国宝や重要文化財は自動的に現行法が適用除外になります。国登録有形文化財の建物は、条例があれば、建築審査会にかけて適用除外とする方法がありますが、他の大多数の自治体と同様、七尾市にはこの条例がありませんでした。

私たちは「文化財的価値を損なわずに、この建物を残せないか」と、七尾市役所の都市建築の担当者と約1年にわたる協議を重ねました。その結果、七尾市では、歴史的建造物の活用に向けて条例の整備に動き出し、「歴史的建造物の建築基準法適用除外」という条例が制定されることとなりました。震災をきっかけにこのような条例ができるケースは稀です。宮城県気仙沼市では国登録有形文化財を、市指定の文化財にして建築基準法の適用除外にすることで歴史的建造物を守りましたが、七尾は気仙沼とは違う方法で対処しました。震災から1年半というスピード感を持って、七尾市条例が制定されたのは本当にすばらしいことだと感じています。

●古さと新しさが共存する魅力ある一本杉通りに

「一本杉通りの復興方針」の中に「明治から令和の家並みが息づく町」というものがあります。古いものはもちろん大事ですが、明治からの建物だけがある通りではありません。「明治から令和の家並みが息づく」とは、それぞれ時代の違った家並みが続いていくのを大切にしていこうという考え方です。

古いものはしっかりと残す必要があるし、今回の震災で新しく建て替えを余儀なくされた建物は、施主さんの思いやこのまちの歴史・文化、そして目指すべき将来もくみ取りながら新しいものをつくって、それぞれが融合し、まち全体が調和するような有機的なまちを目指していく。これが一本杉通り商店街の魅力になるのではないかと考えています。